

---

# 人生の一步

貧弱戦士

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

人生の一步

### 【Nコード】

N1462Z

### 【作者名】

貧弱戦士

### 【あらすじ】

矢神市で生まれた男の子、その子は成長するに連れ他の子とは全然違っていた。親や親戚で嫌われ、遂には施設に入れられた。毎日が嫌な人生、だがそんな彼を引き取りたいとある親子が現れる。親子の間には手を繋いでいる、幼い女の子。それが、彼の一步だった

……

## プロローグ(前書き)

とりあえずプロローグです

## プロローグ

「おい……あいつ、また事件起こしたぜ」

「ほんと、うちで引き取るんじゃないわ」

「いい加減、自分の存在に気づいて欲しい……」

ああ、んなのは知っている

俺がどれだけ迷惑しているかって、胸に刻んでいるんだ

「おいあいつ、今月で暴動事件3回だぜ？」

「マジかよ……あんな小さいのよお」

「何でも、入学当日に上級生ぶん殴ったらしい……たく、今年で3年のくせに、少しは大人になれよ」

違う、俺は違うんだ

俺はただ、あの時パシリにされていた子を助けただけなんだ。なのに……なのに……

拳を強く握ったが、じわじわと中で感じる

赤く、温かく、又メリ気がある……血だった

アア、何で俺は生まれたんだろう？ 何で俺はこんなに嫌われてんだろう？

「……………」

友にも嫌われ、親にも嫌われ、愛されない存在となっていた自分  
いつそ、楽に死のうか？

鏡に写る自分が情けなく、とても惨めに思える

「龍哉君、龍哉君」

先生が呼んでいる。何だろうか

ついに俺は捨てられるのか？ いや、これも人生なのか……  
次の事がわからずとも、俺は先生の所に向かった

「龍哉君、君の里親が見つかったよ」

「……………俺の？」

何が起こったかわからず、手を取られ外に出た  
外は遊び場だが、賑やかな皆は静かになり俺を見ている

「君が……竜宮時 龍哉君かな？」

「は、はい……アンタは」

俺を見下ろしている大人達

だが、それよりも気になったのがその大人達の手を取っている女  
の子だった

髪は長めで、目つきがちょっと悪い女の子

「僕達は今日から君の親だ。君は今日から、刑部 龍哉だよ」

「本当、何か不思議な感じの子ね……ねえ、絃子」

「う、うん……」

頭に手をのせられ、無理やり撫でられる

何が起こっているんだよ……俺には全然わかんねえ

だが、これが人生の一步だった事はこの時の俺は気づかなかった

「部部！ 刑部！ 起きないか、刑部！ まだ授業中だぞ！！」

「んー……んだよバアちゃん、今日は日曜日だぜ？ 全くおつちよこちよいだな」

「私は今年で二十歳だ！！ いいから起きないか！！」

はあ、久しぶりに昔の夢を見たな

目を開ければうるさいおばさんがぎゃーぎゃー言っていた。そうか、まだ授業中だったな

「全く、タツはのん気でいいな。だからテストでも私に負けるんだよ。バーカ」

「ああん！？ たしかに此間のテストはお前の方が上だったが、その前のテストの国語は、俺の方が上だったぞ！！ 絃子！！」

「ほお！ 私は昔の事を忘れるのでな、未来に進んだ方がいいぞ  
ツ！！」

「過去振り返ってみろ！！ テメエのいままでした事、スゲエから  
な！！」

「！？！？ 死ね！！！！ タツ！！」

「テメエが死ね！ 絃子！！」

あれから2年の月が経った……

人生の一步を踏んだ俺は、あれからも成長し続けている

そう、今の俺は刑部 龍哉だ

## プロローグ（後書き）

感想をください!!

## 第一話 龍の本能

「おらー！ー！」

『ドコー！ー！』

「がはっ！？」

「食らえー！ー！」

『ドコー！ー！』

「げふっ！？」

醜い音

そして、その後に聞こえる声

「おいおい、この俺に喧嘩売ってそんなんかよ？ ヨッワー！ー！」

「ぐっ……！！ 化け物が……」

「な、何て奴だ……」

その声を最後の、二人は地面に倒れた

弱い弱い弱いんだよ！！ たく、カスが……

あの時から時間が経ち、俺は中学三年生になっている

人生に時計とは早い。あつという間に時間が経ちまう

その場を離れて、教室へと向かう

「タツ……また喧嘩したのか」

「仕方ねえだろ。アッチから売って来たんだから」

「全く、心配させる奴だ……人の気も知らないで」

途中、別のクラスの絃子が何故か俺のクラスに待ち伏せしていた  
たく……テメエは俺のお袋かよ。美人のくせに  
最後尾の席は、俺の特等席

「大丈夫だ、親父たちには迷惑かけねえ。もちろん、テメエにもな」

「……本当、昔からお前は……」

「いいから戻りな。俺はこれから特別授業があるからな」

「どうせ保健室でサボるんだろ。そうはさせない」

「……………」

なんでわかったんだよ

何でこいつは、俺を気に掛けるんだよ。変わった奴……

「そんなにストレス溜まってんのなら、何かスポーツでもすれば？」

「スポーツ……ねえ」



放課後、あいつは友達と帰ると言って別々に帰っている

「何かスポーツでもすれば？」

……俺が？ あんな律儀なスポーツをねえ

殴れるスポーツ。ん？ たしかダチから聞いた話によれば、すぐ近くの隣町にボクシングジムがあるらしいな……

歩いて5分か……行ってみるか

帰り道を途中で横に入り、隣町へと

「本当にあつた……『鴨川ジム』ねえ」

古いそうだなあ

扉を開き、無言で入る

「コラア……！」

「いて!？」

目の前にはとても酷い形相をした、爺が俺を杖で叩いているんだよ!？」

「ちゃんと挨拶せんかポケエ!?!」

「ちっ!! なんだよこいつ……」

「見たところ入門希望者のようじゃな。まあ、最初は大目に見てやる」

上から目線かよ

つか待て、俺はだま入門するとは一言も言っただねえぞ!! 相手にしてやれるか

俺は爺を無視し、リングへと向かった

「お、おい!! 何リングに上がろうとしているんじゃない!!」

「うるせえ、おい!! 誰か俺の相手になってくれ!!」

グローブをはめ、とりあえずボクサーらしいポーズを取るすると……

「面白れえ、俺様が相手にしてやるよ」

「ちょ!?! 鷹村君!! 君、一応減量中なんだよ」

「いいじゃねえか、ちょっとぐらい。生意気な後輩をシメルぐらい

な

大男がリング上へと上がった

デカイ……けど、デカさだけが勝負じゃねえ

「よおし、来いよ。ゴング無しだ。先ゆず「あつそ」……!?」

瞬時に懐に潜り、男は驚いている

こんな事で驚くのかよ、たく面白くねえなあ……!

最初は弱めの拳で力量を測ってやるよ

けど……

「シッ!」

『ドン!』

「ぐっ!」

『ドン!』

「またか!……? ぐを!」

固いな……防御はまあまあだな

だが崩れば俺の優勢。このまま攻めるのみ……!

「あの鷹村が……押されているだ……!?」

「(何て野郎だ……!!?? こんな早いジャブ、初めてみたぞ。まだプロになって浅いが、中々やるじゃねえか)」

「シッ！ シッ！」

『ドン！ ドン！』

「ぐっ！！」

よし！！ 奴の防御に隙間が開いた！！ このまま一気に  
左腕を引き、右足を軸に……

「シッ！！」

『ドン！！……』

「！？！？ ぐ、ぐ……！！！」

「何！？ 今度はストレートじゃと！？ しかも、右のジャブで鷹  
村のガードに隙を作りおった！！！」

そんな驚くことじゃねえぜ、爺

しかし、コイツ本当にボクサーなのか？ 弱すぎるぜ

「おらああ……！！！」

『ドゥゴォー……！！』

「！？？」

し、しまった……

「奴め、油断してガードを下げおつたな。鷹村のアップパーを食らいおつて」

い、いてえ……顎がいてえ。なんて破壊力だ  
視線をあいつに移すと、奴の目はマジになっていた。しかも、光  
っている

怖い……怖い!!

「今の凄い効いたぞ!! もう一発!!」

また来る!!

避けなきゃ……避けなきゃ

いや、避ける事はねえ!! 何弱気になっっているんだ俺!!  
向かい打つ!! こんなんじゃ、絃子に笑われちまう!!

『ドゴーン!!』

「ぐ、がはっ!?!」

俺ではなく、今度は奴が食らった  
負けられねえ、こんな試合で負けられるか

「み、右ボディブロー……じゃと!?! 初心者のはずなのに、何と  
いう技術」

『ガラガラガラ』

「ああ、疲れた」

「お、スパイヤってんのか。どいつと鷹村さんやってんだ……!?!」

「どうしたあ、木村……はあ!?! た、鷹村さんが押されている  
!?! 誰に!?!」

「さっき来たばかりの、入門希望者にじゃ」

「何……!?!」

さて、そろそろ終わりにさせてもらおうか！  
このつまらない試合に、終止符打ってやるぜ

「負けられるかー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

「こつちもなんだよー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

激しい打ち合い

とりあえず、力を振り絞っての近距離のぶつけ合い

『ドゴー！ ドン！ ドゴー！ ドーン！ー！』

「おいおい、あんな間に入ったら死ぬぞ」

「何てやつだ……あの人に付いていつている」

「ワシには見える。あ奴らの後ろには、鷹と龍が……」

これで本当のお終いだ！ー！

テメエの顔面に、浴びさせてやるぜ！ー！

今度はさらに力を入れ、右全体を放つ

「うおおおおおおおおおお！ー！ー！ー！」

だが、それはお互いそうだった

クロスした腕は、一切邪魔されずたた目標へと向かっていった

『ドオオオオンー！』

そして、互いの顔面へと減り込んだ

「……久しぶりに、燃えたわい」

「それじゃあ、明日から来てね。龍哉君」

「ういっす!!」

あんな奴と試合できたんだ……結果は引き分けだったが、いづれ

あいつを超えてみせる

ボクシングって、こんなに楽しいんだな

絃子、俺は今嬉しいよ

## 第一話 龍の本能（後書き）

おまけ

「ただいま」

「おう、おかえ……タツ……！……！……？　だ、大丈夫なのか！  
！……？　その顔……！」

「あ、ああ。本当、お袋かよ……そうだ、絃子」

「な、なんだ」

「俺、ボクシング始めたから」

「………は？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1462z/>

---

人生の一步

2011年12月8日01時54分発行